

### 令和3年度 奈良市立都跡こども園 研究実践概要

園長名 山中 理恵子  
全園児数 143名

#### 1. 研究主題

“したい” から始まる子どもの遊び  
～ “したい” を育てていく保育者の関わりとは～  
(子どもの心が動く要因を探りながら)

2. 研究年度 3年度

#### 3. 研究主題設定理由

2年間の研究で、“したい” から子どもの心が変わっていく過程で、それを支える発達に応じた援助や環境構成が重要であることが見えてきた。今年度は、子どもの心の動きを見つめながら、心を動かすもの、そして心を動かす要因を捉えた事例により、具体的な保育者の関わりについて分析していくことにした。

#### 4. 具体的な研究内容

##### ①研究のねらい

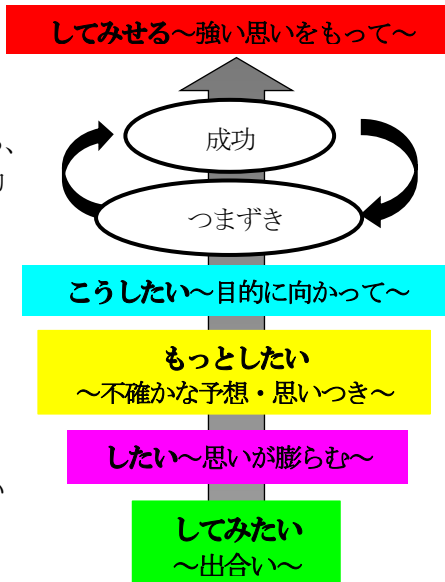
- 遊びの中で子どもたちが主体的にもの・人・ことに関わる姿から、“したい” 思いや心が動いた要因を探り、それぞれに応じた援助や環境構成を考え、工夫する。

##### ②研究の重点

- 子どもたちの心の動きや興味をもったことに寄り添い、学びを読み取る。
- 事例やエピソード、遊びの写真をもとに、子どもの思いや心が動いた要因、援助や環境構成について分析する。

##### ③活動の方法

- 各学年の実践事例を、子どもたちの姿から“したい” と心が動いた姿とその要因を以下のように示し、分析した。



実践事例で、“したい” と心が動いた姿とその要因を以下のように示し、分析した。

【心の変容】	してみたい	したい	もっとしたい	こうしたい	してみせる
【心が動いた要因】	<span style="border: 1px solid green; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>	<span style="border: 1px solid pink; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>	<span style="border: 1px solid yellow; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>	<span style="border: 1px solid cyan; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>	<span style="border: 1px solid red; display: inline-block; width: 50px; height: 15px;"></span>

#### ○ 3歳児（6月）事例1「水が来た」

雨上がり、保育室の前に大きな水たまりができた。「わあ！」「お水や！」と、嬉しそうに歓声を上げたり、ニコニコしたりして水たまりを見ていた。少し離れたところからじっと見ている子もいた。数名がしばらくするとスコップを持って来て水をすくってコップに入れたり、「キャー！」「冷たい！」と手で水を触ってみたい、長靴で水たまりに入って水しぶきを楽しんだりする。保育者も子どもたちと一緒に①「わー！冷たいね」「おもしろいね」と言いながら水をすくってコップに集めたり、手で水に触れたり水遊びを楽しみ、一人一人の水の出会いを見守ったりした。翌日、「またここに水たまりしたい」という子どもの思いを受けて、保育者がタライに水をためて流し水たまりをつくって遊んだ。

【偶然にできた水たまり】  
・安心して遊べる  
保育室の前  
・目の前ですぐに目につく場  
・初めての水たまり

【水たまりとの出会いに寄り添う保育者】  
・一緒に遊んで楽しさを共感する

【場の再現をする保育者】  
・次の日も同じ環境をつくる



数日後「先生、ここに水たまり、したい」と、A児が水をためているタライの側にスコップで少し穴を掘り、水を流そうとしている。①「うん、作ろう」と、声をかけ、A児と同じようにスコップで穴を掘り、水を流す。近くでその様子を見ていた他の子どもたちも興味をもち、思い思いに穴を掘ったり、近くにあったコップや茶碗を持ってタライから水をすくって流したりする。保育者も一緒に子どもたちと同じことを繰り返すうちに、水たまりが大きくなってきた。その様子をA児が「わあ！水が来た」と、嬉しそうに大きな声で話す。②「本当だね、水が来たね」と、子どもの言葉や驚いて見ている様子を受け止め、周りの子どもたちにも声をかけ、水たまりができたことを一緒に喜んだ。

手に持っているコップや茶碗などで、砂をかいたところにも水が流れることに気付いたA児は「わあ！見て！」「水が行った！」と、水が流れている方を指さし、嬉しそうに水を流していたので、保育者は「すごいね！」「こっちに水が来たよ」と、流れている様子を知らせ、一緒に水を流した。また、水たまりにたくさん水を流し、水が溢れ出して流れていることに気付き、「わあすごい！」と、大きな声で言いながら、何度も水を流したりしている子や、その様子を見たりしている子もいた。

【先日の楽しかった経験】  
 ・水の感触や心地よさ  
 ・解放感

【側にあるもの】  
 ・水が入ったタライ  
 ・スコップやコップなどの用具

【一緒に遊ぶ保育者】  
 ・子どもと同じことを楽しむ。  
 ・子どものありのままの姿を受け入れる

【水との関わり】  
 ・流れる  
 ・すくえる  
 ・たまる  
 ・跳ねる

#### 《考察》

子どもたちにとって安心できる場である保育室の前に、偶然できた水たまりでの遊びが楽しく、子どもたちが“してみたい”という思いに繋がった。子どもたちの「水遊びをもう1回したい」という思いを受け止め、水たまりの再現のために保育者が意図的に水を流したことで、水との出会いが広がった。水の感触や心地よさを味わい、3歳児なりに水の変化を楽しみ、自分が水たまりの中で動くとき水が跳ねることや、流れるなど、水そのもののおもしろさを味わうことができた。また、一緒に楽しさや心地よさを感じ、ありのままの姿を受け止めてくれる保育者の存在が、一人一人の“したい”の心を動かした。

#### ○ 4歳児（11月） 事例2 「ドングリ転がし！自分転がし！」

丘の近くにドングリを用意しておく、A児とB児がドングリを丘の上から転がしたり、坂を下りて拾いに行ったりして、繰り返し遊んでいた。A児「先生、ドングリが無くなった！」B児「ドングリと土の色が同じやから、見えないねん」と悩む姿があり、①「本当やね、どうしたらいいかな」と一緒に考え、ブルーシートを敷くことを提案すると、二人とも賛同し、一緒に敷くことにした。ドングリが転がる様子がよく見えるようになり、A児「こっちに転がった」B児「めっちゃ早い」②「本当だね、色んな転がり方があるね」と、ドングリの転がる方向やスピードを感じる。A児「ねえ、一緒に転がそうよ！」B児「いいね」A児「せーの、で行くで」B児「分かった。せーの！」と転がすタイミングを合わせて競走する遊びが始まり、③「どっちが速いかな？頑張れ〜！」と場が盛り上がるように楽しんだ。

A児がもう一度転がそうと丘の上に登ろうとした時、足を滑らせてブルーシートの上で転んでしまった。④「A君、大丈夫？」と心配すると、A児「自分も転がっちゃった。」と笑い、⑤「本当だね、ドングリと一緒に笑いながら話すと、B児も「僕もする！」とブルーシートの上を滑った。B児「めっちゃ楽しい！もう1回しよ！」と坂の上に登り、A児B児が繰り返し遊ぶ姿を見守った。A児「じゃあさ、ドングリと一緒に転がったら面白いかな」⑥「どうやってするの？やってみて」とA児の姿を見守ると、ドングリを手で握りしめながら転がり、途中で手を緩めてドングリを転がしていた。A児「できた！」⑦「ドングリもちゃんと転がっていたよ。すごいね」とA児の試す姿を認め、B児「僕

【秋を感じる環境】  
 ・子ども達の好きな遊びの場所に、秋の自然物を用意しておく

【子どもの様子に応じた環境の再構成】  
 ・丘全体を覆う大きいブルーシートを敷く

【一緒に見守ってくれる保育者の存在】  
 ・自分のアイデアを面白がり、一緒に楽しんでくれる  
 ・なぜなのか考えられるような問いかけ

もやってみる！」とA児と同じように転がった。A児「ドングリ転がしと、自分転がしやな。」B児「ほんまや。自分転がしやな！」①「自分転がして面白いね」と遊びの名前を付ける面白い発想に感心する。A児「ドングリとどっちが速いかな？」B児「見とくわ。やってみて。」と話し、A児が転がってみると、B児「ドングリが速かったな。」①「なんでだろうね？」と投げかけると、A児「ドングリは小さいから、隙間から転がって速いかな。もう1回やろ！」と繰り返し楽しんでいると、周りの子ども達も一緒に遊び始めた。

【遊びを一緒に広げていくやりとり】

- ・新しい遊び方の提案
- ・自分のアイデアを一緒に試したり、考えたりする



《考察》

- ・子どもの様子に応じて、ブルーシートを敷いたことで、よりドングリの転がる様子に気付き、“やってみてみたい”という姿になり、ドングリと一緒に転がりたいという、秋の自然物を遊びに取り入れようとする姿に繋がった。また、偶然足を滑らせてしまったことから、子どもたちの発想が膨らみ、楽しい遊びが展開されていった。子どもの姿に寄り添った環境づくりをすることで“もっとしたい”という姿に繋がった。

○ 5歳児（4月～2月）事例3「米ぬかを使って、ごちそうづくり」  
米ぬかって面白い！（4月～6月）

泥団子を葉っぱで包んで柏餅に見立てている姿があったので、米ぬかを遊びの場に用意した。水を混ぜて水状になったものをシチューや味噌汁、ミルクティーなどにしたり、泥状や塊になったものを丸めてお餅にしたり、型に入れてクッキーやケーキにしたりして見立て遊ぶことを繰り返し楽しんでいった。

水の量を調節してつくった泥状の米ぬかを丸い型に入れてA児「ケーキをつくってるよ！焼いたら出来上がり！」と翌日の変化を予想しながら棚に置いた。翌日、表面が乾いて色が濃くなっている様子に、A児「わあー！」と驚き、そっと手で触ってみる。A児「ふわふわやん！本当に焼いたみたいになった！触ってみて！」と本物のようにできたことをとても喜んだ。混ぜる水の量によって米ぬかの見た目や感触の違いや乾くと変化するなど色々な気付きがあった。保育者は、一人一人が米ぬかに関わる姿を見守りながら気付きや見立てに共感しつつ、友達と互いの様子に気付くことができるように仲立ちをしてきた。

【米ぬかとの出会い】

- ・色がお餅みたい

【米ぬか和水】

- ・混ぜる水の量によって多様に変化するため、試したり見立てたりすることができる

【予想以上の変化】

- ・本物らしくなったことへの驚き

【寄り添う保育者】

- ・米ぬか和水の量を思うままに使う姿を見守ることで、色々と試したくなる。
- ・子どもの発想をそのまま受け止める

↓ 色がついたマカロンをつくりたい！（6月～10月）

米ぬかでマカロンをつくり始め、どうしたら色がつけられるかを保育者が問いかけながら、少量の水とシソ、米ぬかをすり鉢で混ぜる。①

「ちょっと色出てきた」と知らせると、B児「えっ！？ほんまや！」C児「ちょっと色ついてきてる」などと、気付いたことを口々に言う。E児「もっといっぱい混ぜたら」とすり鉢を混ぜたり、E児とF児は、米ぬかや水を少量ずつ足しながら、変化していく様子を見て、保育者や友達と目を丸くしたり微笑んだりする。最初につくったマカロンと見比べてB児「すごーい！うす紫のマカロンができた！」と、友達と一緒に両手を叩きながら飛び跳ねた。

米ぬかに色がつけられることがわかると、草花を選び「ブラックベリーでしたら、めっちゃ色変わった」「赤いお花でしたら、ピンクになった」など、より色づきやすい素材の選択や、思うように色が変化しないと、「もう1個入れてみる」と素材の量を調節したり、すり潰したりして思いの実現に向かって試行錯誤していった。

【共通の目的】

- ・経験から得た知識を知らせ合いながら、試行錯誤する

【色が出やすい素材】

- ・園庭で草花、木の実を栽培している

【疑問とつまずき】

- ・実現する方法を試行錯誤する



## 『こめぬかレストラン』～氷のメニュー～（10月～2月）

10月になると「米ぬかレストランをしよう」と、机を運んだり、素材を選んでレジをつくったりし始める。お店の壁をつくれるように大きな段ボールの衝立を用意すると、A児「穴をたくさんあけてほしい！ここからお客さんが注文するねん！」と、マジックで小さな穴を開けてほしい範囲を囲む。G児「それ、めっちゃいい考えやん！」H児「それ、私も知ってるで！」A児「穴を開けたら声が聞こえやすくなると思う」と心弾んだ様子で話す。保育者も考えを認めながら目打ちで穴をあけると、G児「うわっ！めっちゃ聞こえる！」と、飛び跳ねて拍手する。A児「コロナ対策だよ！」と満足げに話し、更に飾りつけをしてお店の壁になる衝立ができた。

『こめぬかレストラン』がオープンすると、お客さんとやり取りをしながら、野菜や草花、紅茶、お茶の葉などの素材を用意することで、色々なメニューを考え、存分に試して遊ぶことができた。

1月になると、いろいろな型でつくった氷を見て、「氷のメニューもつくろう」と、米ぬかを“きな粉”に見立ててドーナツやわらび餅などをつくることを思いつき、つくりたいものに合わせた型で前日から氷をつくる為に水をはったり、様々な素材を組み合わせてつくったりすることを楽しんだ。

### 《考察》

新たな素材“米ぬか”に水を混ぜることで、変化する見た目や感触、本物らしくなることに魅力を感じたことが、“もっとしたい”と心を動かした大きな要因である。保育者が見守り、時には共に悩み、考え、試し、喜びを共感しながら遊びの一員となって援助することで、思うままの関わりを通して、米ぬかの特性に気付いていった。子どもたちの姿からしたい思いをくみ取り、本物らしくできる用具、素材が豊富にあったことで、「〇〇をつくりたい」と、“こうしたい”という目的をもって選択して試行錯誤することができた。予想通り、予想以上にできた成功体験と、思うようにできないつまづきを繰り返しながら継続して遊ぶことで、“色を変えたい”“れすとらんにしたい”と強い思いをもって遊びを進めていった。

## 5. 研究の成果

- ・3歳児は、偶然の出会いがきっかけとなり、引き寄せられ関わりが始まる。子どもたちのありのままの言動を受け止める保育者姿勢が、子どもの“したい”を育てていく。3歳児の発達に応じた安心できる場をつくることや、用具などを十分に準備しておき楽しいと感じたことをじっくりと繰り返し遊べる場をつくっておくこと、一緒に楽しむ保育者の姿勢などが重要だと感じた。
- ・4歳児は、友達と一緒に遊ぶことが楽しくなってくる時期であり、友達を感じられる場があることで、自分の気付きや発見を友達と共有し、“もっとしたい”と継続して遊ぶ姿に繋がっていくと思われる。保育者は子どもが感じる面白さや気付きを受け止め、共に面白がったり、不思議がったりして、その思いを認め、また思いが続くよう環境を変えていくことで気持ちが膨らみ、遊びが広がっていることが分かった。
- ・5歳児は“したい”“もっとしたい”という心の動きを受け止め、場所や時間、選択できる用具、また新たな素材などがあることで、“こうしたい”と目的をもち遊び続ける。今までの経験から、友達と一緒に予測したり、試行錯誤したりして自分たちで遊びを進めていく姿を、保育者は見守り、子どもの考えを引き出す援助を心がけ、待つこと、そして仲間の一員となって、共に考え、悩み、喜び、面白がる関わりや仲立ちをしながら気持ちを支えることで継続して遊ぶことに繋がった。また、同じ目的をもつ友達の存在があることで、考えを出し合う面白さを感じたり、諦めずに試したりして“してみせる”という強い気持ちで、心を動かしていく要因となっていることがわかった。

## 6. 今後の課題

子どもの心の要因を探ることで、子どもが見ようとしているものを見つめ、子どもたちのありのままの姿を受け止めることの大切さを再確認した。子どもの“したい”思いがより膨らみ、継続して遊ぶための発達に応じた保育者の関わりについて、引き続き努力していきたい。



### 【生活経験から思いつく】

- ・お店に必要なものを考えた  
りつくったりする

### 【明日へ思いを繋ぐ】

- ・翌日へ予想する
- ・前日の姿から素材や用具を増やすなど環境の再構成をし、思いが持続するようにする

